

春告草

第130号 平成31年1月23日 進路指導部発行

センター試験実施される

平成最後となる30回目のセンター試験が1月19日、20日の2日間にわたって行われた。出願者数は全国で57.7万人となっていて、志願者全体に対する現役生の割合は80.6%で、現役生主導の大学入試が続いている。

本校からは157名が一橋大学など6会場に分かれて受験した。

センター受験を終えた6年生は21日に登校して自己採点を行った。センターの得点と各大学で行われる個別試験との総合成績で合否が決まる現行の入試システムにおいて、自己採点の結果は国立大学出願の際、大変貴重な出願資料となる。すなわち、自己採点結果の集約データから得られた各大学の志望者全体の得点分布における各自の位置を確かめて出願を決める。センター試験の得点が期待通りであれば、志望大学へそのまま出願すれば良いし、思ったほど得点できていなければ、ランクを下げて合格が見込める大学へ出願を変更することもある。自己採点結果が各自に届くのは明後日金曜日。国立大への出願は、前期・中期・後期の各日程とも、今月28日から来月6日までの10日間である。

また、5年生は20日にセンター試験と同一問題でセンター試験を模擬受験してきた。これからあと1年でどれだけ目標大学レベルまで学力UPをしなければいけないかが、分かったことだろう。来年のセンター試験は1月18日、19日。まだ先であるが、もう1年は切った。しっかりと準備を進めて、最後となるセンター試験で力を発揮しよう。

4年生の中にも、センター試験を模擬受験してきた人もいることだろう。4年生からは新テスト「大学入学共通テスト」が始まる。現行のセンター試験との変更点は、一部記述式テストへの切り替え、英語外部試験導入などだが、平均点50点を基準に問題作成される点にも注目しておきたい。センター試験が60点設定であるから、新テストは難しくなるのが必至だ。上位層と中位・下位層の乖離も予想される中、求められる学力はこれまでよりもより一層確かな学力である。

今年のセンター試験について、概況を速報する。出題内容やレベルなどの詳細は次号以降、順次掲載していく予定である。(情報は、ベネッセ・駿台による試験概況速報を引用した。)

平成31年度センター試験概況速報

国語 — オーソドックスな出題で、文章全体を把握する力が求められた。昨年よりやや易化 —

全体としての本文の分量は、ほぼ昨年並。評論で昨年同様、本文に関する対話形式の設問が出題。各大問ともオーソドックスな出題で、文章全体の趣旨や主題を把握する力が求められた。全体的に本文が読みやすく、昨年より易化。

日本史B — 史料は扱われたが図版はなく「地名の由来」や「年号」の観点で出題。難易は昨年並 —

大問数、解答数に変更はなかった。史料読解力は引き続き重視されたが、写真や図版は見られず文字情報の読解に絞られた。主題学習に配慮されており、「地名の由来」や「年号(元号)」「日米関係」などの生活に身近なテーマも見られた。全体的な難易は昨年並。



主に国立大理系の人が受験した一橋大学会場。受験タイプ別に試験会場が分かれ、本校生徒は一橋大の他、東京経済大、東京学芸大、津田塾大、明治薬科大、杏林大で受験した。

世界史B — 地図やグラフ問題で昨年より資料読解力が問われた。難易は昨年並 —

大問構成や解答数は変更なし。地域網羅性は継続され、周辺地域からの出題も多くみられた。4択の文章選択問題はやや減少し、昨年出題されなかった6択の年代整序問題が1問出題された。地図問題は1問増加して2問となった。地図やグラフの読解力が求められたが、基本的な内容が中心で、難易は昨年並。

地理B — 多様な資料が用いられ、地理的思考力や正確な知識が問われた。難易は昨年よりやや難化 —

多様な図表が数多く用いられ、限られた時間の中で正確に図表を読解する力と地理的な見方・考え方が求められた。第2問では大問全体でコーヒーを題材に展開され、関連する事項の基本的な知識や地理的思考力が要求された。正確な知識を問う問題がみられ、難易は昨年よりやや難化。

現代社会 — 国内外の政治・経済や社会の動向をふまえ、幅広く正確な知識・理解が問われた。難易は昨年並 —

経済分野が減少し、政治分野・国際経済分野の出題が増加した。趣旨を問う出題、写真を使用した出題がなくなり、オーソドックスな出題形式で、時事的な理解を含め、学習した内容が確実に身につけているかが問われた。全体として、基本的・標準的な知識が求められており、難易は昨年並。

倫理 — やや細かな知識を問う問題が増加したが、組合せ問題が減少した。難易は昨年並 —

大問構成や出題分野は変更なく、リード文をしっかり読んで解答する形式も引き続きみられた。現代思想では構造主義やロールズ思想が問われた。組合せ問題が減少して受験生には取り組みやすくなったが、やや応用的な知識や理解も問われた。難易は昨年並。

政治・経済 — すべての分野から基礎的な事項が網羅的に出題された。難易は昨年並 —

例年通り、4大問中3大問の一部の設問は「倫理、政治・経済」との共通問題であった。基礎的な理解を幅広く問う出題の中では、年代整序問題や資料を用いた問題などもみられた。全体的に教科書に基づいた基本事項の理解を中心に問われており、難易は昨年並。

倫理、政治・経済 — 倫理は正確な思想理解、政経は基本事項の知識とやや深い理解を要求。昨年より難化 —

すべての設問が単独科目「倫理」および「政治・経済」と共通であった。倫理分野では昨年に続き統計資料が使用されず、文献資料の読解や、思想の正確な知識理解が問われた。政治・経済分野は基本事項の知識とやや深い理解が問われた。両分野とも基本知識を中心に細かい部分まで問う出題がみられたため、昨年より難化。

数学I 数学A — 第5問で「図形と計量」と「図形の性質」の融合問題が出題された。難易は昨年並 —

大問数、配点は昨年と同様で、問題量、計算量は昨年並。「データの分析」では例年通り実際のデータを素材とした問題が出題された。また、第5問「図形の性質」では、数学I「図形と計量」の分野の知識を利用する問題が出題された。全体の難易は昨年並。

数学II 数学B — 解答数が昨年よりも増加し、配点が細かく刻まれた。難易は昨年並 —

大問数、配点は昨年と同様。問題量、計算量は昨年並だが、解答数が昨年よりも増加し、第2問や第4問では配点が1点の設問が多く見られた。また、第4問「ベクトル」では空間ベクトルの問題が出題され、図形の形状を正しく把握する力が求められた。全体の難易は昨年並。

物理基礎 — 典型的な素材を中心に、より深く思考させる問題が出題された。難易は昨年並 —

典型的な素材を中心に、物理基礎の内容から幅広く問われた。原子と放射線に関する知識問題が目新しい。また、傾きが異なるすべり台をすべり落ちるときの小物体にはたらく垂直抗力や時間などの大小関係を問う、思考力を要求する問題もみられた。難易は昨年並。

化学基礎 — 実験操作や実験の安全など実験を扱った出題が増加した。難易は昨年並 —

実験操作や実験の安全、身近な物質の性質や利用に関する出題がみられた。計算の量は昨年と同程度だが、数値の選択だけではなく、文章選択問題の形式でも数値計算を必要とするものがみられた。難易は昨年並。

生物基礎 — 基本的な知識を用いた思考を要する問題が多く出題された。昨年より難化 —

基本的な知識を用いた思考を要する問題が多くみられた。仮説を検証するために必要な実験を選択したり、初見のグラフの読み取りや、二つの実験を組み合わせで考察したりするなど、多様な出題がみられた。昨年より難化。

地学基礎 — 図を用いる問題で、これまで地学基礎で見られなかった出題が増加。昨年より難化 —

6 択の問題が昨年の 2 問から 5 問へ増加。示準化石の産出状況を表す二つの模式図から地層を対比する問いなど、これまで地学基礎でみられなかった出題が増加した。自然災害や環境問題に関する設問が、地学基礎で初めてみられなかった。昨年より難化。

物理 — 光の屈折に関する探究活動的な問題が出題された。難易は昨年よりやや難化 —

選択問題が熱力学と原子になった。二人が透明な壁の両側に立っているときの光の経路を、与えられた情報を読み取って作図する、光の屈折に関する探究活動的な問題が出題された。部分点を与える問題がなくなり、配点 5 点の問題が増え、昨年よりやや難化。

化学 — 計算量が昨年より増加。思考力や応用力を要する問題が多く、昨年より難化 —

昨年より計算問題の数が増加した。複数のステップを要する問題や見慣れないグラフを読み取る問題など、目新しい問題が出題されており、題意の把握が難しく、思考力や応用力を要した。昨年より難化。

生物 — 例年同様、思考力を必要とする考察問題が多く出題された。難易は昨年並 —

昨年同様、幅広い出題であったが、全大問でグラフ、図表などを読解する必要のある問題が出題され、思考力が求められた。一方、数値選択問題が昨年の 5 問から 3 問に減少した。第 7 問で、「生態と環境」と「生物の進化と系統」の内容が扱われた。難易は昨年並。

地学 — 5 択以上の問題が増加。金星と火星の大気の大気構造が問われた。難易は昨年並 —

5 択以上の問題や図を用いた問題が増加した。基本的な知識問題もあるが、正確な知識に基づいて論理的考察や計算を行う必要のある問題が多かった。金星や火星の大気の大気構造についての問題など、受験生にとって目新しい問題が多かった。難易は昨年並。

英語・筆記 — 出題形式に大きな変更なし。素材文の総語数はやや減少。難易は昨年並 —

表を含む説明文や物語、論説など、様々な素材を読解する力が求められた。全体の概要を問う出題は変わらず、学習指導要領で重視される英文の内容を素早く大づかみする力と共に、細部を正確に読む力も求められた。

英語・リスニング — 出題形式に大きな変更はなく、音声＋視覚情報で答える問題が出題。昨年より易化 —

音声情報とイラストや図表を含む視覚情報とを組み合わせて答える問題や、3 人の話者による話し合いの場面での出題がなされた。聞き取った内容を、設問に応じて処理する力が、昨年に引き続き求められた。また、細かい情報の聞き取り、直接述べられていない情報の類推なども求められた。ただし全体的には取り組みやすく、難しかった昨年より易化。

大学入試ガイド(3)

私立大学の入試

連載 3 回目は私立大学の入試を解説します。私立大学の入試では多種多様な選抜方法が実施されています。名称だけでは分かりにくい入試制度もあるので、それらの基本的な仕組みについて学習しておきましょう。

●私立大一般入試のスケジュール

国公立大学と同様、私立大も選抜方法は大きく分けて 3 つある。すなわち、一般入試、AO 入試、推薦入試の 3 つ (※)。AO 入試、推薦入試は、国公立大と合わせて別号で解説するので、ここでは一般入試に限定して解説します。(※現 4 学年受験年度より、一般選抜、総合型選抜、学校推薦型選抜とそれぞれ名称変更になります。)

まず、受験する前年の 7 月上旬には受験科目が判明する。募集要項の公表は各大学によって異なるが、9 ~ 11 月がピークとなる。募集要項といっても紙媒体の要項の配付は少なくなり、各大学のホームページからダウンロードする方式になっている。

入試はセンター試験後の 1 月下旬から、まず関西地区を中心に本格化し、2 月中旬には首都圏を中心に最盛期を迎える。3 月には後期入試、2 期募集などが実施されるが、3 月下旬には大半の私立大で入試は終了する。

●私立大一般入試の出題科目

センター試験利用入試を除く私立大一般入試の科目を見てみよう。英語は「コミュニケーション英語 I・II・III、英語表現 I・II」を課す大学が多い。国語は「国語総合のみ」または「国語総合、現代文 B、古典 B」を

課す大学が多いが、「国語総合（古文・漢文を除く）、現代文B」を課す大学も見られる。地理歴史は日本史・世界史・地理の各B科目が圧倒的。理科では、「基礎・発展」1科目が多く、難関大や医学科では「基礎・発展」2科目を課すところが目立つ。数学は、文系では数学Ⅰ・Aや数学Ⅰ・Ⅱ・A、理系では数学Ⅰ・Ⅱ・A・Bや数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・Bなどを課す大学が目立つ。

なお、私立大一般入試で小論文を課すところを受験する場合は対策が必要となる。

科目数は、難関大を中心に基本的には3教科型。近年では2教科（選択）型も増加している。

文系だと、英語、国語必須に地歴・公民・数学から1科目選択が主流。2教科型は英語・国語型、あるいは英語必須+他教科1科目選択。または任意の2教科選択など。

理系は、英語・数学・理科の3教科が基本で、2教科の場合は英語・数学科型、数学必須+英語・理科から選択、などがある。

●複線入試の主流は「センター利用」

私立大では、同じ大学の学部・学科に、A日程・B日程など複数の選抜方式があって、試験日が重ならなければ併願できる。こういった方式を「複線入試」というが、複線入試には、一般的な3教科入試の他に、センター試験利用入試や2～1教科入試、得意科目重視型など様々なタイプがある。

複線入試の主流といえるのはセンター試験利用入試だ。この入試方式は、個別試験を行わずセンター試験の得点だけで判定するケースが多いが、個別試験を課してセンター試験の成績と総合して判定したり、センターと個別試験の両方を受験し、いずれか高得点の方で判定したりするケースもある。

私立大のセンター試験利用入試のメリットは、国公立大との併願がしやすく、センター試験の受験だけで複数の私立大を受験できること。国公立大志願者にとってはセンター試験対策がそのまま私立大対策になるので人気も高く、同じ大学・学部でもセンター試験利用入試は一般入試より難易度が高くなる。だが、センター試験利用入試の合格者は募集人員の10倍程度出すのが普通なので、戦略を立てて挑戦したい。

●「全学部日程」試験利用で併願を増やす

いわゆる一般入試は、学部・学科ごとに異なる問題を使って異なる日程で試験を行う。これに対して全学部日程入試では、全学部や複数の学部・学科が、共通の問題で、同じ日に一斉に試験を行うため、1回の受験で複数の学部併願することが可能になる大学が多い。

さらに、学部ごとの試験とは別の日に行われるので、同じ学部・学科を2度受験することが可能になるほか、併願校との日程重複も回避しやすくなるメリットがある。

●併願割引なども使い賢い出願

私立大学の受験料は一般入試で3万5千円前後である。国公立大の他、私立大を4～5校併願すると受験料で20万円前後が必要になる。センター利用入試の場合は1万7千円前後で、同じ大学の他学部も受験すると受験料が割引になる大学もあるので、併願校を考える場合はその辺も考えておこう。また、受験前に奨学金の申し込みができる大学もあり、受験勉強以外の進路研究は、今のうちから進めておくと良い。

センター試験利用入試の科目・配点例

センター試験のみ
立教大-社会[センター4教科型] 外(200)・「数・理から1」(100)・国(200)・ 「地歴・公から1」(100)[4教科4科目]
早稲田大-政治経済 英(200)・数2(200)・国(200)・理1(100)・ 「地歴・公から1」(100)[5教科6科目]
センター試験+独自試験併用
中央大-法・法律、政治[センター試験併用型] 〈センター〉英(100)・国(200)・ 「地歴・公、数学、理から2」(200)[4教科5～6科目] 〈独自〉英(200)
早稲田大-文化構想、文[センター試験プラス] 〈センター〉「地歴・公、数学、理から1」(50)[1教科1～2科目] 〈独自〉国(75)・英(75)

明治大・商学部の複線入試の例

全学部統一入試(2/5) 英(200)・国(150)・「地歴・公、数から※1」(100) ※2科目受験した場合は高得点科目を採用
センター試験利用入試(前期日程・3科目方式) 国語(200)・外(200)・「地歴・公・数・理より※1」(100) ※高得点科目を採用
センター試験利用入試(前期日程・4科目方式) 国語(200)・外(200)・「地歴・公・数・理より※2」(200×2) ※高得点科目を採用
センター試験利用入試(前期日程6科目方式) 国語(200)・外(200)・数学ⅠA(100)・数学ⅡB(100)・ 理(100)・「地歴・公から※1」(100)※高得点科目を採用
商学部個別入試(2/16) 英語(150)・国語(100)・「地歴、公民、数学から1」(100) ☆英語4技能試験利用方式との併願は不可
センター試験利用入試(後期日程) 国(200)・数(200)・外(200)・ 「地歴、公民、理科から※1」(200) ※高得点科目を採用